

新刊紹介

永野順造著「國民生活の分析」

高 妻 靖 彦

一頃「國民生活の安定」が内閣の政綱にも掲げられ、ジャンナリズムでも盛んに論議されたことは周知の事實である。それがめまぐるしい政治現象の轉換に眩惑されてか、何日のまにか何處かに置き忘れられ、ひとは「國民生活の安定」に就いて余り語らないやうである。併し、このことは「國民生活の安定」が不必要になつたことを意味するものではなく、却つて今程、それが、要請されてゐるときはない。何故ならば、重慶政府の徹底的潰滅と長期建設とを同時に遂行する段階にある現在、日本はますます多數の健全なる「兵士」と健全なる「勤勞者」を必要とするのであり、而して、この兩者は「國民生活の安定」を俟つて始めて得られるのであるから。「國民生活の安定」の問題は、單なる物質的な問題ではなく、旺盛な戰鬪的精神の基礎でもあり、堅忍不拔な統後精神の限界でもある。「健全なる精神は健全なる肉體に宿る」の語の意味深さを、今こそみるべきときであらう。我國の「國民體位の低下」といふ悲しむべき實情——例へば本書の六五頁以下をみられたい——の最も基本的な原因が、我國勤勞國民の「過勞」と

「榮養不足」にあることは、何人も否定し得ない事實であるが、このことは結局國民生活の問題であることを示してゐる。

「體位低下」は、軍當局によりて指摘されることにより、はじめて社會問題化したのであるが、産業的にも、今事變による我國産業の編成替・高度化は、頑強にして智能高き「勞働力」を要求し、この面からも「體位向上」の必要は叫ばれてゐる。ところで、「體位向上」を圖るには、單なるスポーツ獎勵や衛生施設の改善、或は觀念的な生活改善や生活指導に止まることなく、具體的な實質的な國民生活の向上を圖ることでなければならぬ。しかも、それが具體的・實質的であればあるほど、現實の具體的な國民生活の科學的認識を前提條件としなければならぬ。それなくしては、意圖に於て、いかに具體的・實質的であらうとしても結果に於ては觀念的な空疎なものに墮さざる得ないで、國民生活を向上させることは不可能となるであらう。斯くみるときは、「國民體位向上」の必至の前提條件としての國民生活の研究は、極めて重要なのであるが、不幸にして、我國に於けるその科學的研究は、それほど豊ではないのである。このやうな事情の裡に、國民生活の具體的認識を意圖する本書が、優れた内容をもつて、出版されたことは、本書の持つ價值を二重に高めるものである。

ところで、著者によれば、國民生活の科學的認識とは、國民生活一般の理解ではなく、「國民の基本的諸層、就中勤勞國民諸層の生活が各各に於て收入乃至生活程度に應じて明確にされねばならぬ。國民生活の認識は平均値や總平均から決して導き出せないものである。……この個個の國民層の生活の充分な認識と相互の聯

關の基礎に立つて、はじめて全體としての國民生活は正しく理解され得るであらう。」(本書、序説、一六頁)而して、「國民生活の推移は世帯の伸縮と收入の増減と物價の騰落とによつて決定する。しかし世帯の伸縮を一應措いて問はないならば、それは收入の増減と物價の騰落とに歸着せしめ得る。」(同、一七頁)

いま、國民諸層のうち基本的な勤勞層の一つである、勞働者の生活を本書——第四章、勞働者の生活——に依つて、一瞥してみると、最多數の勞働者世帯の大きさは、五人強乃至六人弱であり、生活の源泉として收入に就いては、工場勞働者の賃銀に就いてのみ大要を紹介すれば、軍需品産業たる金屬工業や機械器具工業は比較的に高い。これはこれらが最も高度の熟練と技術を要する産業部門であり、必しも時局的な現象ではない。また、賃銀は農村に近づく程全般的に低下してゆくが、婦人勞働者の賃銀のみは地域的相異が極めて微弱——紡績女工を例にとれば、東京市七七錢、名古屋市七五錢、廣島市七三錢、仙臺市六一錢——である。東京市での最高は、機械器具工業の組立工の四圓四錢——仙臺市では一圓六五錢——で、最低は製絲女工・紡績女工の七七錢、男では日傭人夫の一圓六六錢である。これを月收に推算すると「工業中心地たる東京市に於てこそ月收四十五圓以下と云ふのは日傭勞働者のみにしか見受けられぬが、工業中心を遠ざければ遠ざかる程月收四十五圓以下の勞働者の比重は次第に増大する。……新しい大工業の中心として顯著な發展を遂げつつある名古屋市や、吳海軍工廠を近くにひかへる廣島市に於てきへ月收八十圓以上の勞働者は寥々たるものに過ぎない。我國最高の賃銀水準を示

めず東京市に於ても月收九十圓を越えるものは極めて僅少である」と云はねばならぬ。」(二〇〇頁)これらの收入を持つ勞働者は、いかなる物質的消費生活を營んでゐるであらうか? われわれ日本人の主食物米に對する支出は、五十圓乃至六十圓の生活に於ては、全生活費の約三〇%を占めてゐる。(二一頁參照) 飲食物費全額では全生活費の約四五%である。従つて爾余の五五%、約三十圓でそれ以外の全生活費——住居費、被服費、其他一切——が賄はれてゆくわけである。

註、昭和十一年十一月の日本銀行調査によれば、重要工業地方の男工の實收賃銀總平均(民營工場)は二圓十五錢一厘、これを出勤日數廿六日とすれば月收五五圓九三錢である。

翻つて、必要最低限の「營養」を攝取するに、必要な最低限の收入をみてみると——第二章、營養食と必要最低收入——體位の爲めに必要にして充分な營養には未だ不充分であるが、それでも川口市の勞働者の疾病率を六割も減じたと云はれる、川口市の一日二二錢の「營養食」乃至は同程度の營養を攝取するに、月收八十圓二五錢、日收換算三圓九錢^(註)は必要である。この數字と前掲の收入とを比べてみれば、「かくて我國に於ける勞働者の大部分をも占める月收四十圓乃至五十圓の生活では、體位向上の爲には量的にも質的にも未だ不充分な川口市の「營養食」乃至は同程度の營養を攝取することも完全に不可能である。従つて我國の勞働者の大部分は質的に極めて不良劣惡な營養を攝取してゐるばかりでなく量的にも亦甚しい不足に悩んでゐると云はねばならぬ。」(一一四頁)と著者の云はれるのも肯ける。

註、これらの數字は昭和十年乃至十二年のものであるから、昭和十四年四月に於ては、必要最低収入は月收九圓五四錢となる。(一二五頁參照)

「現在に於ける勤勞國民の「榮養」に於て第一に解決さるべき問題は榮養の量であらう。勞働強化と長時間勞働とはより多量のエネルギーを消耗し、従つてより多量の榮養を必要とするにも拘らず、是等の勞働度に逆比例して低下する収入と、騰貴につぐ騰貴をする物價とはかへつて榮養の質を低下させるのみではなく、榮養の量さへも減少せしめ、一日の勞働を榮養によつて恢復せしめることすら全く不可能である。従つて青少年がより低劣な體位を構成して行くばかりでなく、可なり抵抗力の強い成年さへもまた一日の勞働に堪へ得ず次第に衰弱し結核化せざるを得ないのは當然の結果である。」(一一五—一六頁)しかし、榮養の量の問題が解決されても、質の問題が解決されねば「國民の體位の向上」は不可能である。「榮養の量的解決はたゞ消耗エネルギーの補填の解決に過ぎない。即ち量的に充分な榮養攝取に要する収入の上に、更に質的に優良な榮養を得るだけの収入が國民に與へられない限り、國民の體位の向上は不可能であると云はねばならぬ。しかし月收四十圓乃至五十圓ではかかる要求は到底満足し得ないことは斷るまでもない。」(一六—一七頁)醫學博士藤原九一郎の試みた體位のために必要にして充分な榮養を含む「標準食」のためには月收二百圓乃至二百五十圓の収入を必要とするとされるのであるから、そのためには、物價が一定とすれば収入が今の四倍乃至五倍に増加しなければならないわけである。われわれは、ここでも、

「現實」と「理想」との余りの懸隔の前に、たざるのである。日本の現實は、低物價政策を要求し、國民はいやが上にも堅忍持久して、長期建設に勵まねばならぬときであるから、収入の増加はこの面からは望みうべくもない。併し、日本の現實は、他の面では健全な人的資源を要求し、そのためには、國民の「榮養」を先づよくしなければならぬのであり、そのための具體的な端的な效果的方策は収入の増加、或はそれと同一の効果を有する方策を實施すること、換言すれば「國民生活を安定」させることである。然かも、後者こそ、長期建設達成のより基本的な條件であるから、前者の途と直接的には對立するとは云へ何日かは——長期建設の達成に邁進する限り——この方向に現實は進むであらう。換言すれば「現實」は「理想」へと歩み寄るであらう。

以上は本書の一部分を、極めて粗雑に、しかも、勝手な紹介のし方をしたつたが、この拙い我儘な紹介を通じて、一人でも多くの人が、本書を繙かれ、我が國民生活の科學的認識を深められ、たならば、篤學な著者も紹介者の粗雑さを許して下さるだらう。

最後に本書の目次は、

序説

第一章 最近に於ける國民生活の推移

第二章 榮養食と必要最低収入

第三章 給料生活者としての教師の生活

第四章 勞働者の生活

第五章 或る「生活改善」の批判

第六章 「綴方教室」の生活構造

(時潮社 四六判、三一三頁、定價一圓九十錢、昭和十四年六月刊)